

十九世紀後半のヨーロッパにおける政治的ラディカリズムとその挫折

自然主義文学としての *The Princess Casamassima*

砂川典子

1. はじめに

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、急進的な政治思想や社会構造の変革を主題とする小説が多数出版された。ジェイムズの *The Princess Casamassima*、ツルゲーネフの *Virgin Soil*、ゾラの *Germinal* はその典型例であり、各作品はそれぞれの社会的背景や作家の視点を通じて、急進主義や革命運動の現実を描き出している。特にジェイムズの作品は、政治的な主題に加えて個人の倫理的葛藤や心理描写に重点が置かれており、同時代の自然主義文学と比較すると独自のアプローチを示している。本稿では、*The Princess Casamassima* とツルゲーネフ、ゾラの作品を比較することで、社会的・政治的主題の扱い方、登場人物の描写、そして文学的手法における共通点と相違点を明らかにする。さらに、この比較を通じて、一般に自然主義文学としての試みが「失敗」と見なされがちなジェイムズ作品を再評価し、その文学的意義や特色を再検討することを試みる。

2. ジェイムズの中期小説とその背景

ジェイムズが中期小説に取り組んでいた1880年代半ばから後半は、政治的・社会的関心を深め、新たな方向性を模索した時期である。現実政治に直接関与することはほぼなかったが、この時期の書簡には、英露関係の緊張、スーダンの反乱、グラッドストン政権の危機、大不況に苦しむ貧困層、ビスマルク外交への不満、アイルランド自治問題やテロ事件など、当時のイギリスの内憂外患が々々しく記されている。暗く不穏な社会状況はジェイムズの想像力を刺激し、旧体制や権威への反抗、社会改革の理想と挫折、芸術と政治の狭間で揺れる人間といった主題を生み、中期小説の萌芽となった。本小説はジェイムズの最も政治的な作品であり、バルザックのリアリズムに加え、特にツルゲーネフやゾラの影響が色濃い。1884年2月にハウエルズに宛てた手紙からは、ゾラやドーデのペシミズムや露骨な表現に戸惑いつつも、強い刺激を受けていたことがうかがえる。

3. *The Princess Casamassima* (1886) と *Virgin Soil* (1877)

Virgin Soil は、1861年の農奴解放後、経済的成长の一方で専制政治の圧政に苦しんでいたロシアを舞台に、インテリと農民の関係を描いた小説である。1870年代には、「ヴ・ナロード（民衆の中へ）」を掲げ、農民＝ナロードを理想化した知識人が農村に入り教化を試みるナロードニキ運動が展開されたが、ツルゲーネフは本作でこの運動の挫折を物語化した。*The Princess Casamassima* と *Virgin Soil* は時代背景や社会的文脈を異にするものの、重要な共通点を持つ。両作の主人公はいずれも庶子であり、出生に起因する社会的・精神的な不安定さを抱えている。*Virgin Soil* の主人公ネジダーノフは、貴族の父と身分の低い母のあいだに生まれた理想主義的詩人であり、*The Princess Casamassima* のハイアシンスもまた、貴族の血を引きつつ下層階級に育ち、社会的アイデンティティの揺らぎを生きている。両者は急進的政治運動に関与し、民衆の解放や社会改革を志すが、最終的には運動に全面的にコミットできず自殺に至る。庶子であること、ラディカリズムへの関与、自殺というモチーフは、両作品に共通する要素である。しかし、両作の差異も明白である。ネジダーノフは、経済的に困窮してはいない教育あるインテリであり、農民に対する共感の困難を自覚しつつも、「民衆の中へ」飛び込み、農村での活動に身を投じる。そこには、啓蒙すれば民衆が解放の主体となるというナロードニキ運動の理想主義が反映されているが、現実には農民はインテリを受け入れず、敵意を示し当局へ密告する。理想と現実の乖離の中で使命感を失ったネジダーノフの自殺は、ロシアにおけるインテリと民衆の断絶、ならびにラディカリズムの破綻を象徴している。これに対し、ハイアシンスは下層階級に属しながらも労働者階級への連帯意識をほとんど持たず、上流階級への憧憬と芸術的洗練を通じて、次第に大衆への共感を失い、運動の大義も見失っていく。彼は芸術やそれを生み出した封建的秩序を称揚するようになり、革命運動が孕む民衆の暴徒化や野蛮性に恐怖を抱く。フランス革命やパリ・コミューンの恐怖の記憶を背景に、ハイアシンスは要人の暗殺という任務から逃避し、政治的参加そのものを拒絶して死を選ぶ。彼の自殺は、民衆の裏切りに起因する挫折ではなく、民衆に対する共感の喪失と恐怖がもたらした帰結である。一方で、両作品には挫折する主人公に対置されるアリスト的人物も配置されている。*Virgin Soil* のソローミンは、農民を理想化せず、教育や産業振興を通じた漸進的な社会改良を志向する実務的改革者であり、運動の破綻や弾圧を生き延びる存在として描かれる。*The Princess Casamassima* の薬剤師ミニュメントもまた、労働者階級出身の活動家として、民衆への共感と

連帯を失わず、現実的に運動を推進しようとする。両者は、挫折する主人公に対し、漸進的社会改革という「もう一つの可能性」を体現する存在である。この差異は、両作における民衆観の違いを反映している。ツルゲーネフにおいて民衆は、無知でありながらも啓蒙によって変革の主体となりうる存在であるのに対し、ジェイムズにおいては、文明や芸術を脅かす潜在的な危険として描かれる。*Virgin Soil* はラディカリズムとその失敗を描く物語であり、*The Princess Casamassima* はラディカリズムの拒否とその不可能性を描く作品として位置づけられる。ネジダーノフが理想を行動に移そうとして挫折したのに対し、ハイアシンスは行動以前に恐怖と懐疑によって身動きを封じられ、可能性そのものを閉ざされている点に、両作の決定的な違いがある。

4. *The Princess Casamassima* (1886) と *Germinal* (1885)

Germinal は、フランスの炭鉱労働者階級の過酷な現実を描き出す。主人公エティエンヌは、政治的・理想主義者として労働運動の中心に立つが、無秩序なアーティズムには与せず、理性的な改革を志向する。しかし状況は悪化し、運動は炭鉱夫たちの暴徒化やストライキによって失敗に終わる。エティエンヌはハイアシンスと異なり運動に積極的に関与するが、急進主義への懐疑や暴力性への不安という点では共通している。彼はネジダーノフやハイアシンスのような貴族の庶子ではなく、貧困にあえぐ炭鉱労働者であり、教育や社会的資本にも乏しい。また、自らの出自や遺伝に強い不安を抱き、衝動性や暴力性、退廃的欲望が自己を規定するのではないかと恐れている。こうして彼は、読書や運動によって培われた理性と、遺伝と環境に由来する堕落や暴力性の緊張を内包する人物として描かれ、ゾラ的自然主義の「遺伝と環境」の主題が前景化される。他方でエティエンヌは、ソローミンやミニュメントと共にアーティスト的改革者であると同時に、労働運動の理論的・実践的リーダーとしてより前面に位置づけられている。彼は労働者階級の生活改善に強い関心を抱きつつ、過激な暴動に流されることなく、漸進的かつ現実的な改革を模索し続ける。ストライキは挫折するものの、ネジダーノフ的絶望やハイアシンス的政治的不能に陥ることはない。*Germinal* における民衆は、理想化されつつも改革を後退させる存在であり、同時に暴徒化の潜在力を持つ恐怖の対象として描かれる。エティエンヌは、炭坑の仲間に同胞的連帯に基づく共感を抱くが、同時に激情や暴力性が容易に噴出する現実にも直面する。理性的に組織化し穩健的な改革を指導しようとしても、民衆の憎悪や衝動は彼の意図を超えて暴走し、凄惨な事態を招く。それでも彼は、民衆に絶望することなく組織の内部に留まり、実践的行動を継続する。遺伝的な制約や運動の失敗を経験しながらも、非暴力的かつ協調的な変革を志向する点において、現実主義的な労働者像・社会改革者像の完成形として描かれている。

5. 結び

これら 3 作品はいずれも、19 世紀後半のヨーロッパにおける政治的ラディカリズムとその挫折を主題とするが、その表象のあり方には明確な差異が見られる。ツルゲーネフはインテリ層の自己欺瞞や農民との断絶を冷静かつ風刺的に描き、ロシア社会の構造的矛盾を明らかにする。ゾラは人物を社会構造の一部として捉え、資本家と労働者の対立の必然性、ならびに暴力の不可避性とその恐怖を前景化する。これに対しジェイムズは、ラディカリズムの拒否と上流階級的な美や芸術への傾倒を軸に、個人的心理的葛藤と孤立を精緻に描いた。*The Princess Casamassima* は、*Virgin Soil* や *Germinal* と比較すると、写実主義的・自然主義的な意味での社会的リアリティが乏しく、地下活動の描写も曖昧で、物語後半の暗殺指令の唐突さなど非現実的に映る側面を持つ。しかし、こうした作品全体に漂う曖昧さや不安、不確実性こそが、むしろ作品の特質であり、現代性を先取りしている要素とも考えられる。庶子として生まれたハイアシンスは、貴族的世界への憧憬と民衆・急進運動への接近のあいだで引き裂かれ、いずれにも帰属できないまま孤立する。この状態は、外部から承認されず、自己の居場所を見いだせないという現代的な自己疎外を体現している。また、彼は社会改革の理念を理解しつつも、感情的・倫理的には同調できず、その内的葛藤は個人意識と社会的価値の断絶、すなわち社会的・政治的疎外として読むことができる。この点でハイアシンスの姿は、コンラッドの *Under Western Eyes* や *The Secret Agent* に描かれる、政治的陰謀や理念の狭間で孤立し、いずれの陣営にも完全には帰属できない主体のあり方と親和的であり、近代における政治参加の不可能性を先取りするものとも言えよう。さらに、突如として与えられる暗殺指令は、曖昧な現実を漂っていたハイアシンスを、非合理で不条理な社会的・政治的力に直面させ、個人の意思や自由を超えた力の前の無力さを露わにする。この構図は、主体が理由も十分に理解できないまま不可避的な決定に直面させられる点で、カフカ的な不条理を想起させる。以上の点から、ハイアシンスは単なる内省的主人公ではなく、遺伝的二重性と自己分裂、いずれの階級にも属しえない孤立、そして理解不能な力によって無力化される主体を体現する存在である。*The Princess Casamassima* は、現代的疎外と不条理を表象する作品として、近代リアリズムからモダニズムへの橋渡しをなすものと位置づけ直されるべきであろう。